

英語 「生きて働く知識及び技能」の習得を



POINT I 知・技

学びの主役は子ども ～自ら選択しながら習得を目指す知識及び技能～

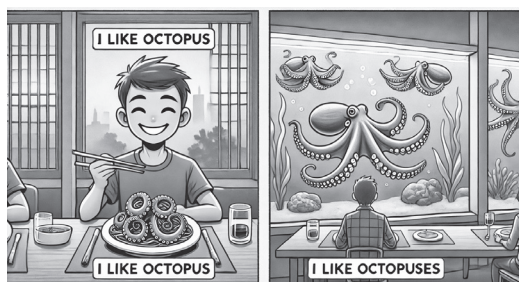
「生涯学び続けてほしい」「何歳からでも学び直すことはできる。一緒に学んでいこう」という姿勢で、日々授業に取り組んでいる。そのゴールに向かっての歩みは一人一人異なる。サポーターとして、それぞれの子どもたちに合った学習方法を支援していきたい。

1 Quizlet などの英単語帳アプリを活用する

まずは、受容語彙（読んだり聞いたりして理解できる単語）の蓄積を目指したい。母語では日常生活において膨大なインプットを自然に行っているが、英語学習においては同様の環境を期待することは難しい。教員が厳選した受容語彙を Quizlet でデジタル英単語帳にまとめると、子どもたちはオンライン上で神経衰弱などのゲーム形式で楽しく反復学習ができる。個人でも教室全体でも取り組めるのが利点であり、さらに、教員同士で英単語帳のデータを共有することで、働き方改革にもつながるだろう。

2 語源・イメージとリンクさせる

単語を覚える際、語源を解説することも効果的だが、絵やストーリーにして覚えると記憶に残りやすいとも言われている。



【生成A I（スクールA I）に描いてもらった絵】

例えば、「I like cats. のとき cat は複数形なのに I like octopus. のときはなぜ octopus が複数形にならないのか」という質問には、日本語で解説した後、絵を提示した。絵を描くのが苦手な私は、生成A Iを活用している。絵の助けによって、一瞬で理解する子どもたちも見られ、「I like cat. だとしたらどうなる?!」といった気付きへとつながることができる。実際に自分なりに家庭学習ノートに絵と英語を組み合わせると、理解を深めている子どももいる。表情や場面が英語の内容と一致していれば、それは「生きて働く知識」として定着していると捉えることができるだろう。

3 文中でどう使うかを例示する

教科書にある英文を理解する上で、同じ単語を用いた様々な英文を例示することで、よりその単語の使い方の理解が深まることが期待される。例文集を作る際は、生成A Iの力を借りることで教師に負担が掛かることなく、目の前の子どものレベルに合った大量のインプット材料を用意することができる。子ども自身が「使ってみよう」という言い回しから覚えるのも有効な方法の一つだろう。

生きて働く知識及び技能を身に付けるためには、既に習得している知識や経験と結び付けながら、断片的な理解にならないようにしたい。知識や技能の有用性を実感し、それらを今後も活用しようとする態度につながることで、子どもたちの主体性が育っていくだろう。

目指して

芽室町立芽室中学校 教諭 森田 明香



POINT 2 態度

生成AI×英語教育 ～広がる学びの可能性～

1 子どもが読みたい教材づくり

好きなことについて、自分が読めそうな英語で書かれているからこそ「読んでみたい」と思える。その内容を誰かに伝えたいという気持ちだが、自然なコミュニケーションを生み、知識と技能の結合につながる。既習事項の復習の際に、場面設定や設問の条件、活用する知識・技能、さらには難易度などを調整することで読みやすい教材を作成できる。ここでも生成AIは大きな役目を果たすだろう。

2 「読むこと」「書くこと」を統合する

子どもたちは目的・場面・状況を把握し、情報を抜き出して整理し、英語で表現することに繰り返し取り組むことで活用することに慣れ、コミュニケーションに必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けると考えられる。そのためには、英語の表現に主体的に注目しながら読み、読んだ内容を基に自ら表現するという意識をもつことが重要である。Q&A形式で課題に取り組むことでより実際のコミュニケーションに近い場面で学習が可能となる。このような活動を行う際には、「根拠のある解答か」「場面状況に合った表現か」「既習事項をうまく活用しているか」などの評価の観点を明確にしつつ、「正確さ」「適切さ」の両面を高めていきたい。

3 自分の伝えたいことを英語で表現する！

子どもが自分の言葉で英作文にチャレンジしたいと思ったときは、学びのパートナーの1つとして次のような生成AIの活用が考えられる。

(1) 足場かけ

1人ではできないが、助けがあればできる子どもにとって、生成AIによる支援は有効だろう。どこから書いていいのかわからない子どもには、見本文を提示することで英文の「型」を身に付ける手助けとなる。

(2) 協働学習

ある程度「型」が身に付いたら、自分の言葉で表現する体験を協働的に行う。言い換え表現を提示しながら、繰り返し行うことで「言いたいことを伝える術」を学び、英語で発信することへの自信につながる。



【学びのパートナーを自分で選ぶ子どもたち】

(3) 自己添削

「ループリック評価」を活用した自動添削機能を使って、書き足りないところを補うヒントをもらいながら何度も発信を続けることにより表現がブラッシュアップされ、「本当に使える英語」の定着が期待される。

子どもが自分に合った学習方法で自信を育み、自分の言いたいことを自分の言葉で伝え、理解し合える体験、これこそまさに心揺さぶられる主体的な学びだろう。